

第7章 中国東北地方の古代史（前漢時代）

1 前漢時代の中国東北地方

(1) 前漢王朝の樹立

「前206年」に「漢王朝」が樹立する。すぐに大凌河下流域を攻める。

其最顕者為安冕辰伝氏。本出東表牟須氏、與殷為姻。讓国於賁彌辰伝氏。賁彌氏立未日、漢寇方薄其先入朔巫達、擊退之。淮委氏、沃委氏竝列藩嶺東為辰守郭。潘耶又觀兵亜府閭以掣漢。 『契丹古伝』

（訳）その最も顕著なる者が安冕辰伝氏である。本（もと）東表の牟須氏の出であり、殷と姻をなす。国を賁彌辰伝氏に譲る。賁彌氏が立って未だ日が経たないうちに漢が攻めてきて、方（まさ）に薄（せま）り、その先朔巫達に入る。これを撃退す。淮委氏、沃委氏は並び連なり嶺東に藩（かきね）をつくり辰の守郭となる。潘耶は又亜府閭に兵を觀せ、以て漢を掣（ひきとど）む。

○大凌河下流域で「安冕辰伝氏（天氏）」は「国を賁彌辰伝氏（卑弥氏）に譲る」。

■その直後に「漢が攻めて」来る。「これを撃退す」とある。

(2) 漢王朝と中国東北地方の支配

「漢王朝」は「大凌河」までの支配を諦める。

漢興為其遠難守、復修遼東故塞、至涇水為界、属燕。 『史記』朝鮮列伝

（訳）漢が興り、その地が遠く守り難いので遼東の故塞を修復し、涇水までを境界とし、燕に属させた。

「秦」の時代は「亭浚勃大水（大凌河）」が境界であった。ところが「前漢王朝」になると「亭浚勃大水（大凌河）」までは「遠く守り難いので遼東の故塞を修復し、涇水までを境界とし、燕に属させた」とある。大凌河の先まで攻めたが、「撃退」されたからである。

「遼東の故塞」とは「万里の長城」である。

「涇水までを境界とし」とある。「涇水」は「万里の長城」と「大凌河」の間にあることが分かる。

□「涇水」は「万里の長城」と「大凌河」の間にある。

■漢は「涇水」までを支配範囲とする。

2 漢と衛氏朝鮮

(1) 衛満の亡命

『史記』は「衛満」が「朝鮮王」になる経緯を次のように記す。

「前195年」に「燕」から「衛満」が中国東北地方へ逃亡する。

朝鮮王満者故燕人也。(中略)燕王廬綰反入匈奴。満亡命。聚黨千余人、魍結蛮夷服、而東走。出塞、渡涇水、居秦故空地上下部。稍役属真番朝鮮・蛮夷及故燕・齊亡命者王之、都王險。 『史記』朝鮮列伝

(概訳) 朝鮮王満はもと燕の人である。(中略) 燕王廬綰は漢に背き匈奴へ逃げる。衛満も亡命する。千余人を集め、髪を結び、蛮夷の服を着て東へ走った。塞を出て涇水を渡り、秦の故(いにしえ)の空地に居す。しばらくして真番(地方)の(箕子)朝鮮、蛮夷および故燕・齊の亡命者等を支配し、ここに王となり、王險に都す。

「燕」からの逃亡者「衛満」が樹立した国を「衛氏朝鮮」という。

「衛満」は「塞を出て涇水を渡り、秦の故(いにしえ)の空地に居す」とある。

○「秦の故(いにしえ)の空地」とは

- 「秦」の支配領域は「大凌河」までであった。
- 「漢」は大凌河までは遠いので「涇水」までを支配領域とした。
- すなわち「涇水」から「大凌河」までは「空き地」になっている。

□「衛満」はその「空き地」に「衛氏朝鮮」を樹立する。

- 「前195年」である。

図14 前195年の衛氏朝鮮の位置

(2) 漢と衛氏朝鮮の争い

衛満の孫「右渠」の時代になると問題が起きる。

會孝惠高后時、天下初定。遼東太守即約満為外臣、保塞外蛮夷、無使盗辺、諸蛮夷君長欲入見天子、勿得禁止。以聞、上許之。以故満得兵威・財物、侵降其旁小邑。真番・臨屯皆来服属。方数千里。

伝子至孫右渠。所誘漢亡人滋多。又未嘗入見。真番旁衆国欲上書見天子、又擁闕不通。 『史記』朝鮮列伝

(概訳) 孝惠とは恵帝のことである。在位は紀元前194年～188年である。高后の在位は紀元前187年～180年である。この時期は、天下初めて定まるとあるように世の中は落ち着き、安定していた時代である。

遼東太守は衛満と次のことを約束した。衛満は外臣となり、塞外の蛮夷を保ち、辺境では略奪をさせないようにすること、また諸蛮夷の君長が天子に謁見したいと望んだときはこれを禁止しないこと。これを奏上すると上(天子)

は許可した。以て故に衛満は兵威・財物を得て、その傍らの小邑を攻めて降伏させた。真番・臨屯は皆来て服属した。その広さは方数千里という。子に伝え、孫の右渠に至る。誘われて来る漢の亡人は益々多くなる。また未だかつて入朝したことがなく、真番や旁衆国が天子に謁見したいと欲して上書してもこれを抑えて取り次がないという。

(3) 漢は右渠を責める

漢は遂に右渠を諭す。

元封二年、漢使涉何、誘諭右渠、終不肯奉詔。何去至界上、臨涓水。使御刺殺送何者朝鮮裨王長、即渡、馳入塞。

遂帰報天子曰、殺朝鮮將。上為其名美、即不詰、拜何為遼東東尉都督。朝鮮怨何、發兵襲殺何。 『史記』朝鮮列伝

(概訳) 元封二年(紀元前109年)、漢は涉何を右渠のもとに使わし右渠を諭したが、ついに詔に応じようとはしなかった。涉何は去ろうとして国境まで来た。涓水に臨んで、涉何は自分たちを送る朝鮮の副王長を御者に命じて刺し殺した。そしてただちに涓水を渡り、塞に駆け込んだ。

涉何は帰り、天子に「朝鮮の將軍を殺した」と報告した。上(天子)はその聞こえがよいので詰問せずに、涉何を遼東の東尉都督に任じた。朝鮮は涉何を怨み、兵を發して涉何を攻め殺したという。

○「衛氏朝鮮」の「王險(城)」は「涓水」の近くにあることがわかる。

(4) 漢は衛氏朝鮮を伐つ

漢はついに朝鮮を伐つことを決意する。

天子募罪人擊朝鮮。其秋、遣樓船將軍楊僕、從齊浮渤海。兵五萬人。左將軍荀彘、出遼東、討右渠。

右渠發兵、距險。(中略)樓船將軍將齊兵七千人先至王險。右渠城守。(中略)左將軍擊朝鮮涓水西軍、未能破自前。(中略)天子為兩將未有利、乃使衛山、因兵威往諭右渠。右渠見使者頓首謝、願降、恐兩將詐殺臣、今見信節。請服降。遣太子入謝、獻馬五千匹、及饋軍糧。人衆萬余、持兵、方渡涓水、使者及左將軍疑其為變。謂太子已服降、宜命人毋持兵。太子亦疑使者左將軍詐殺之。遂不渡涓水、復引歸。山還報天子、天子誅山。左將軍破涓水上軍、乃前、至城下、圍其西北。樓船亦往會、居城南。右渠遂堅守城。数月未能下。

『史記』朝鮮列伝

(概訳) 天子は罪人を募り朝鮮を撃つ。その秋、樓船將軍楊僕を遣わし、齊

より船で渤海に浮かぶ。兵五萬人。左將軍荀彘（ジュンテイ）は遼東を出て右渠を討つ。右渠も兵を發し險要によってこれをふせぐ。樓船將軍は齊の兵七千人を率いて王險城に至る。右渠は城を守る。（中略）

左將軍は朝鮮の涇水の西の軍を撃つが、未だ破ることができないでいた。天子は両將軍が未だ利有らずの状態なので衛山を使わし兵の威力をもって右渠を諭した。右渠は使者を見て頓首し謝り、「降服を願っていたが、両將軍が詐り、臣を殺すのではないかと恐れていた。今、信節を見た。降服を請う」という。右渠は太子を遣わし謝すことにして、馬五千匹を献じ、および軍糧を送ることにした。人衆萬余が兵器を持ち、まさに涇水を渡ろうとした。使者と左將軍はかれらが急變して背くのではないかと疑い、太子に謂う、「すでに降服したのであるから人々に兵器を持たぬように命じてほしい」と。太子は亦使者と左將軍が自分を殺すのではないかと疑った。そこで遂に涇水を渡らずに引き返した。衛山は天子に報告すると、天子は衛山を誅した。

左將軍は涇水上の軍を破り、前進して王險城の城の下まで行き、その西北を囲んだ。樓船は亦城の南に居した。右渠は城を堅守した。数月しても未だ降りなかった。

- 「衛氏朝鮮」は「渤海沿岸」にある。
 - 衛氏朝鮮の都（王險）は「渤海沿岸」にある。
 - 「涇水」も渤海沿岸にある。
 - 「塞（万里の長城）」も渤海沿岸にある。

(5) 涇水と王險城

- 「涇水」について
 - 『説文解字』…涇水出楽浪鏤方（ろうほう）、東入海。
 - 『水経注』…出楽浪鏤方、東南過臨涇縣、東入海。

「涇水」は「東入海」とある。「涇水」は東に流れて海に入る川である。

従来は「衛氏朝鮮」は朝鮮半島にあると解釈している。そのため「涇水」を鴨緑江や大同江や清川江に比定している。しかしこれらの川はすべて西に流れて海に入る。すなわち「黄海」に流れている。

渤海沿岸の川は六股河、烟臺河、その他の河がある。決め手となるのは『水経注』の次の記述である。

涇水出楽浪鏤方縣、東南過臨涇縣、東入海。 『水経注』
（訳）涇水は楽浪郡の鏤方縣を出て、東南に臨涇縣を過ぎ、東に流れて海に入る。

「涓水」は「東南に流れ、その後東に流れて海に入る」とある。

漢が王險城を攻める時「左將軍は朝鮮の涓水の西の軍を撃つ」とある。さらに「左將軍は涓水上の軍を破り、前進して王險城の城の下まで行き、その西北を囲んだ」とある。

また「楼船は亦城の南に居した」とある。

このように流れる川は地図を見ると「興城河」だけである（図15）。「涓水」は「興城河」であろう。

□「涓水」＝「興城河」

図15 渤海沿岸の川

(6) 王險城の位置

従来は、衛氏朝鮮の都である「王險城」は朝鮮半島の「平壤市」であるといわれてきた。中国でも、韓国でも、日本でもそれが定説になっている。

ところが「王險城」について次のように記す。

（註）臣瓚云、王險城在樂浪郡涓水之東也。

『史記』朝鮮列伝

（訳）王瓚云う、王險城は樂浪郡の涓水の東にある。

「涓水」と「王險城」の位置（図15）

□「衛氏朝鮮」は渤海沿岸にある。そのため「大凌河」より先にある真番朝鮮や旁衆国が朝貢するのを妨げることができた。

■従来説のように「衛氏朝鮮」が「朝鮮半島（平壤）」にあるならば大凌河の先にある真番朝鮮や旁衆国の朝貢を妨げることにはできない。

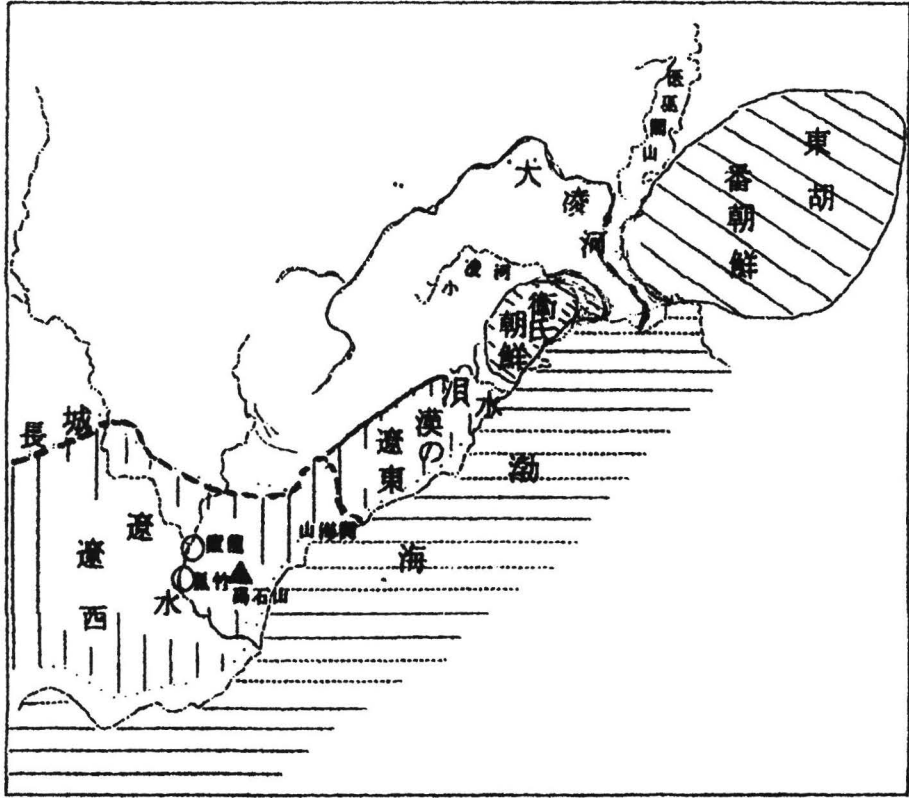


図14 前195年の衛氏朝鮮の位置

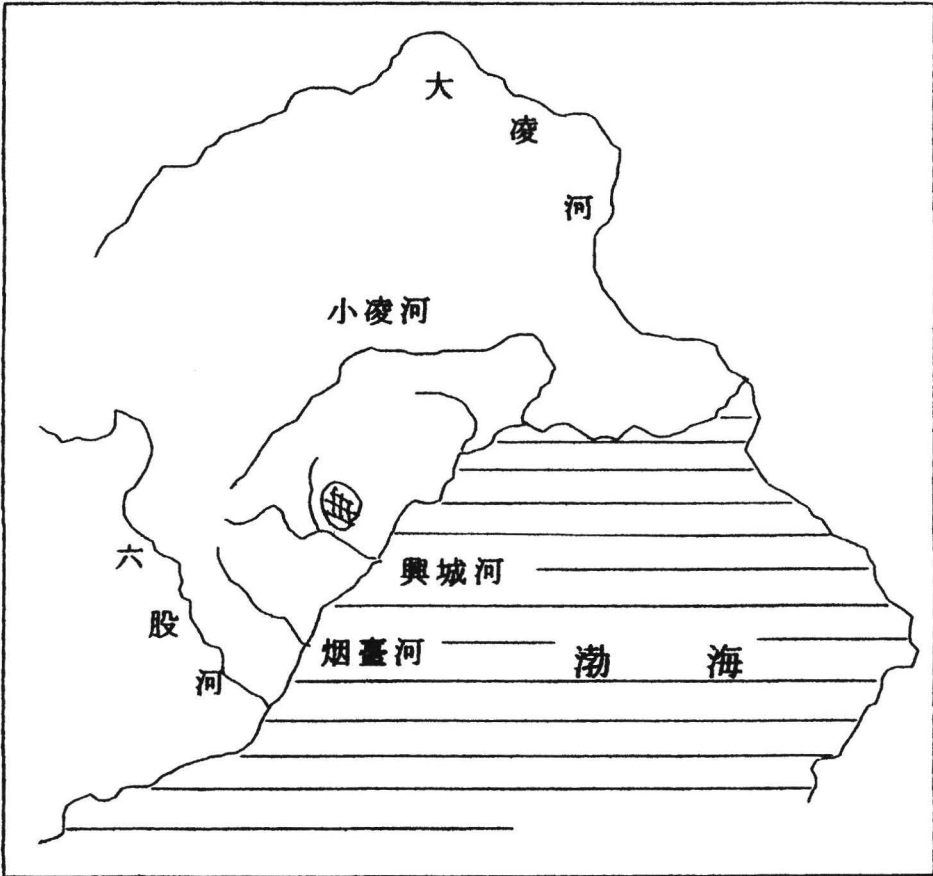


図15 渤海沿岸の川